

第七章 洞窟で迷子になる

土曜日はベッキー・サッチャーの誕生日で、彼女の友達は何もかもわくわくしていました。「トム、あなたは川の近くでの私のお誕生日ピクニックに招待されているのよ」とベッキーはうれしそうに言いました。

「ぜひ来てね！ 私のお友達はみんなそこにおいて、とっても楽しい時間を過ごすわ。ピクニックの後は、マクドゥーガルの洞窟を訪ねられるわよ」

「ありがとう、ベッキー！」とトムは言いました。

「楽しみだね」

トムはベッキーが好きだったので、とてもうれしく思いました。

トムはインジャン・ジョーと宝物のことについて気にするのをやめ、ベッキーの誕生日のピクニックについて考えました。

土曜日の朝、大きなボートがベッキー、トム、そして他の友達を乗せて川を下りました。

お母さんやお父さんたちはいませんでしたが、18歳ぐらいの年上の少年や少女が数人だけいました。

少年少女たちはゲームをして遊び、昼食時には皆がおいしい料理と大きな誕生日ケーキを食べました。

午後、子どもたちはマクドゥーガルの洞窟を訪ねに行きました

そこはわくわくする場所でしたが、少し不気味でした。

中はとても暗かったので、皆ろうそくを持っていました。

マクドゥーガルの洞窟はとても大きく、何百もの長いトンネルがありました。

迷子になりやすかったのです。

子どもたちはその大きな洞窟で遊び、走り回りましたが、彼らはいつも入り口近くにいました。

彼らは道に迷いたくありませんでした。

トムとベッキーは、洞窟の中の新しいトンネルを見つけたいと思っていました。

彼らは二人きりになるまで歩きに歩きました。

他の子どもたちはどこにいたのだろうか？

彼らは迷子になったのです！

夕方、他の子どもたちはボートに乗り、セント・ピーターズバーグへ戻って行きました。

彼らはおしゃべりをして、笑いましたが、とても疲れていました。

彼らは、トムとベッキーがボートにいないことに気付きませんでした。

ハックはピクニックについて知りませんでした。

村のお母さんたちはハックのことが好きではなく、決して彼を誕生日のピクニックに招待しませんでした。

その晩、ハックには賢い計画がありました。
ハックはインジャン・ジョーの宝物を見つけたかったのです。
ハックは古い家の外にある木の後ろに隠れました。
ハックは、「俺はここにいて待っているぞ。インジャン・ジョーが出てきたら彼の後をつけて、宝物を見つけるんだ。トムには明日言おう」と考えました。
寒い夜で、雨が降り始めました。
真夜中に古い家から二人の男が出てきました。インジャン・ジョーと友人です。
ハックはそっと彼らの後をつけました。
「何ておかしなことだ！ 彼らはダグラス未亡人の家へ向かっている」とハックは思いました。
「でもどうして？」
突然、その二人の男は立ち止まりました。
インジャン・ジョーは、「何年も前にダグラス未亡人のだんなが俺にひどいことをしやがった。今度は俺がやつを傷つけてやりたいんだ。俺は彼女の耳、鼻、そして顔を切ってやる！ そしてお前は俺を手伝わなきゃならん！」と言いました。
「ああ、どうかそのかわいそうな年老いた女性を傷つけないでくれよ」とジョーの友人は言いました。
しかしインジャン・ジョーは笑って立ち去りました。
ハックはその会話を聞き、逃げ出したくなりました。
でもハックは、ダグラス未亡人がいつも自分に親切だったことを思い出しました。
「俺は彼女を助けないといけない」とハックは思いました。
「あの男たちは危険だ」
ハックはひとつ案を思い付き、そしてビル・ウェルシュさんの家へ走って行きました。
「ウェルシュさん、俺だよ、ハックだよ！ ドアを開けて！」
ウェルシュさんはドアを開けました。
「どうか俺を助けて、ウェルシュさん」とハックは言いました。
「二人の男がダグラス未亡人を傷つけないと思っているんだ！」
ウェルシュさんと彼の息子たちは未亡人の家へかけつけ、インジャン・ジョーと彼の友人を驚かせました。
その二人の男は、ウェルシュさんと彼の息子たちを見ると逃げて行きました。
「私を助けてくれてありがとう」とダグラス未亡人は皆に言いました。
次の日、ハックはウェルシュさんに会いに行きました。
「君は勇敢だ、ハック」とウェルシュさんは言いました。
「君はダグラス未亡人の命を救った。インジャン・ジョーと彼の友人はひどい男たちだ。われわれは彼らを見つけねばならん。さあ座って、私の家族と一緒に朝食を食べなさい」
ハックは自分がダグラス未亡人の命を救ったので、うれしく思いました。
そして今、彼にはウェルシュ一家という新しい友達ができたのです。

セント・ピーターズバーグの誰も、トムとベッキーがどこにいるか分かりませんでした。

トムとベッキーの家族はとても心配していました。

トムとベッキーはマクドゥーガルの洞窟にいました。

トムは洞窟の入り口を見つけようとしたが、できませんでした。

二人はそこで夜を過ごし、翌朝はどうしていいか分からずにいました。

二人は寒く、おなかをすかせ、おびえていました。

トムはベッキーの手を取り、二人はキャンドルを持って長いトンネルを何時間も歩きました。

すると二人はたくさんの黒いコウモリがいる、広くて何もない空間を見つけました。

「あらやだ！」とベッキーが叫びました。

「コウモリよ！ あちこちで飛んでるわ！ 私、怖いわ、トム！」

コウモリは彼らの頭の上を飛び、トムとベッキーが逃げると、コウモリは彼らを追いかけました。

ようやく、コウモリは去って行きました。

「トム、私たちはどこにいて、これからどうしたらいいのかしら？」と、ベッキーは泣きながら尋ねました。

「ごめんよ、ベッキー、僕には分からないよ」とトムは悲しそうに言いました。

二人は長く暗いトンネルを歩きました。

疲れておなかをすかせていました。

「ここにはトンネルがたくさんありすぎるわ」とベッキーは泣きながら言いました。

「誰も決して私たちのことを見つけないわ。私たちはここで死んでしまうのよ！」

「心配しないで、ベッキー」とトムは勇敢に言いました。

「僕たちはこの洞窟から抜け出すんだ」

ベッキーはポケットに一切れのケーキを持っていて、二人はそれを食べました。

その後、二人のろうそくが終わると、何もかも真っ暗でした。

二人は疲れて、眠りました。

目を覚ますと、二人はとてもおなかですき、喉が渴いていました。

トムは物音を聞きました。

「ベッキー、物音が聞こえたかい？」とトムは尋ねました。

「誰かが僕たちを探しているんだ！」

ベッキーはトムを見てほほ笑みました。

「見に行ってくるよ」とトムは言いました。

「ここにいるんだよ、ベッキー！ 動かないでね！」